

第1章 本研究と本書の目的

1 本研究の目標

文化財は基本的には長い年月の間継承されてきたものであり、それによって高い価値を有するようになったものである。一方で文化財の中に含まれつつも遺跡・遺物については日本においては基本的に地下に埋没して存在しており、社会との接点が一度途絶えたものである。すなわち、遺跡のうちの大半は意識的・無意識的に関わらず継承されてきたものではなく、本質的に現代社会への継続性と直接のつながりを持たない。

本研究の大きな目標は、そうした現代社会への継続性と直接のつながりを本質的に持たない遺跡を通じ、地域の歴史の継続性と現代社会へのつながりを語らせる手段を明らかにすることである。換言すれば、地域が長い歴史の中で独自に歩んできた継続性や、過去と現在との連続性を、遺跡によってどのように示すべきかを検討し、現代社会への遺跡の価値の還元を一層充実した形でおこなう方法を明らかにすることである。

しかし、遺跡といってもその類型・存在形態はさまざまである。日本においては遺跡の大半は地下に埋没しておりその痕跡を留めないことは確かであるが、実際にはそうではなく、現在も地上で容易に姿を確認できるものも相当数ある。顕著なものは山城や城郭などであり、古墳や横穴、時には貝塚も同様である。古代寺院の基壇が地上に残り、そこに礎石が並ぶものもある。古代に定められた条里は今日の土地の区割を規定する場合もあるし、近世以前の道路は舗装されつつも現在も残り、旧街道として今日の街並みを形づくる場合もある。そうした「比較的新しい」遺跡や顕著な盛土等を伴う遺跡だけでなく、耕作時に土器が出土することで縄文時代の集落の存在が知られるとともに常に遺跡との「接点」を感じられる場所もあるし、地域によっては竪穴建物の竪穴が埋まり切らずに残る場合もある。地名もその一つといえるかもしれない。誰かが明確に継承しているものではないが、現代社会との接点が完全に途絶えていない遺跡はさまざまな類型で多く存在する。

そうした非常に多様な遺跡すべてを対象として上記目標達成のため検討をするのは、全貌把握の点でも、異なる性質をもつ遺跡の比較検討の点でも容易でない。そこで本書では日本列島に広く存在しかつ今日も存在が明確であること、また早くから調査研究・保存活用が取組が進められてきたことから、古墳を検討対象とする。

古墳は今日にまで地上に姿を留めることが大半な遺跡であり、一般に埋没している日本の遺跡の中では特殊な存在である。それゆえ古墳にはその後の利活用の痕跡、すなわち地域の歴史的履歴が遺構として刻まれ、累積的に蓄積され、残されていることが多い。いわば「地域の歴史の集合体」の象徴たりうる極めて稀な存在といえる。

この点は古墳の文化財的価値として他に類を見ないほど重要であるが、これまでそうした視点から古墳は評価されてこなかった。古墳を対象とした調査研究や遺跡整備においては、あくまで一般に「古墳」が対象とされそれ以降の痕跡は「攪乱」として扱われる場合が多いためである。しかしそうした古墳築造後の履歴をポジティブに捉えることで初めて遺跡を通じて地域の歴史の継続性と現代社会へのつながりを明確にすることができる。古墳のもつこうした特質は、現代社会への遺跡の価値の還元を一層充実した形でおこなう方法を検討するために適している。

2 本研究の背景

地域における教育的・文化的資源、観光資源としての活用や交流人口拡大による地域活性化のための起爆剤として、今日、文化財への注目がますます高まっている。様々な文化財の中でも遺跡は地域の歴史を直接物語る証拠として、現代の我々と地域が歩んできた歴史・文化をつなぐものとして親しまれている。多くの人が遺跡を訪れ、そこから出土した遺物を直接目にする事で、その地域の歴史と文化を実感する。そうした行為を通じて地域アイデンティティーの確立にも寄与する。遺跡とはそのような地域の歴史・文化と現代の我々をつなぐものとして認識されている。

しかし、本当に遺跡は地域の長い歴史・文化と現代の我々をつなぐものであるのかは検討の余地がある。先述のとおり一般的に日本において遺跡は地下に埋没し、その存在が忘れ去られ、現代の我々の生活とは切り離されたものであるからである。様々な類型からなる文化財の中でも、現代の我々との接点（継承）が一度失われた例外的な存在である。継承により文化財の価値が増すとすれば、そこに文化財としての遺跡の限界がある。

もちろん、整備により歴史公園などとして現代社会と改めて接点を持った遺跡も多い。また、一度生活との接点が絶たれ忘れ去られて長い年月が経過したことが、新たな遺跡の「発見」による「驚き」や「ロマン」につながる側面もある。その点は文化財としての遺跡の強みである。しかし、そうした強みがあっても、遺跡はそれが機能した時代の事は示しても、地域の歴史の継続性やその遺跡と現代の直接のつながりを物語ることは本質的にできない。

一方で、そうした限界はこれまで明瞭に意識されてきたことはないと考える。そうした意識が明確化されないまま、遺跡と現代社会は実態は直接的な接点をもたない点と点として存在していることが大半であるにも関わらず、漠然と「つながり」が強調されてきたのが現状である。もちろん、過去の人間の活動の有象無象・有形無形の痕跡がなにがしかの形で継承され、今日の私たちの思考・生活、その他さまざまなあり方を規定していることは確かである。総論としてそうであることは正しい。しかしここで問いたいのは、総論として「遺跡とはそういうものである」ということではなく、個別の文化財として扱われる遺跡が、果たして本当にそうした機能を果たしているのかということである。漠然と歴史や文化・文化財、過去とはそうしたものであるとして「つながり」を述べるのではなく、個別個別の遺跡とのより具体的な「つながり」をどのように明言できるのか。遺跡を通じて歴史・文化を現代に結び付け、その価値を現代社会に真に還元しようとするとき、こうした漠然と「つながり」が強調されるという限界は超克されなければならない。

2019年の改正文化財保護法施行により、文化財の保存活用計画の国による認定がおこなわれることとなった。それに伴い、市町村による史跡等の保存活用計画の策定が活発化している。また、速やかな保存活用計画の策定により、早くも計画的な調査事業や整備事業に着手し始めた市町村も多い。

一方で、それら保存活用計画の策定に際しては、特に古墳を中心とするその後の利活用の痕跡が明確な遺跡において、遺跡の本質的な価値とは異なるその後の履歴をどのように評価し位置づけるべきか各地で課題となっている。そうした要素の整備の在り方や留意点はすでに一部で検討されていることも確かである（奈良文化財研究所 2020）。しかしその事例の大半は近世城郭の近代における利用に関するものである。古墳における「遺跡の履歴」はまだ実態の把握や事例の蓄積すらおこなわれていないのが現状である。今日、遺跡の活用への要望がますます高まる中で、本研究の緊急性は高い。

また、国指定の史跡の種類のうち古墳は最も数が多く、市町村等による調査や整備の取組も多

い。保存活用計画の認定制度が相応の成果を挙げつつある一方で、現実的な課題が認識されるようになった今こそ、これまで等閑視されていた古墳が古墳ゆえにもちうる顕著な文化財的価値を認識し、社会に一層還元するための方法を確立することが急務である。

3 本書の目的と構成

本研究の大きな目標とその社会的な背景は以上のとおりである。

そうした目標達成のため、古墳の現代社会との接点は現在どのような形で作り上げられているのか、すなわち古墳の整備がどのような展開を経て、今日どのようにおこなわれているのかを明らかにする。そのうえで古墳に刻まれた古墳築造後の履歴がどのように活用されているのかの現状を明らかにする。

そのための作業として全国各地でおこなわれてきた古墳の整備事例を収集する。それに基づき整備実施年代ごとに内容を確認し、古墳の整備がどのように変遷・展開してきたのかを検討する。合わせて整備対象の全体的な変遷や埋葬施設や墳丘・周濠・周堤など個別の整備箇所についての変遷の大きな流れを確認することで、古墳整備の全体的な動向を明らかにする。そのうえで古墳築造後の履歴が古墳の整備においてどのように・どの程度反映され活用されているのかを古墳整備史の中に位置づけ、古墳築造後の履歴の活用状況を明らかにする。

こうして古墳の整備における古墳築造後の履歴の活用状況を明らかにすることで、「遺跡の履歴」が古墳に付与する新たな価値についての検討の素地を整える。それにより古墳が地域の歴史の継続性と現代社会へのつながりを明確にするための重要な「文化資源」となることを明らかにする。以上が本書の目的である。

これらの検討により、遺跡を通じて地域の歴史の継続性と現代社会へのつながりを明確にする手段を明らかにするという本研究の大きな目標達成のための一歩とする。

なお、本書では検討対象として古墳だけでなく横穴や地下式横穴なども含める。横穴は古墳と同様に地上に露出している場合が大半であり、また同時期に築造されたものであることから古墳と同様の手法で整備される場合もあるからである。地下式横穴については墳丘を伴うものもあるが、墳丘がまったく確認されないものも多い。地上に姿を留めるという特徴から検討対象として古墳を設定した趣旨にはそぐわないが、こちらも古墳と一体で整備される場合があり、その場合には古墳と同様の手法がもちいられる場合もある。そのためこれらについても一体として扱う。

本書では上記の目的を達成するため以下の構成で検討を進める。

まずはじめに「第1章 本研究と本書の目的」として本研究課題の背景と大きな目標を示し、その解決のために本書でおこなう検討の対象・内容・方法を示す。これはここまで述べてきたところである。

続いて「第2章 古墳の特質と文化財としての特質」として検討対象とする古墳がそもそも持つ特質とそれによって現代に現れる文化財としての特質を整理する。古墳の特質・古墳の文化財としての特質は、現代社会との関わり方やその整備の考え方・手法を大きく規定する要素となるからである。それとともに古墳の特質は地域の歴史の継続性と現代社会へのつながりを明確にするための重要な要素となると考えるためである。

「第3章 古墳整備の研究史と本書の視点」ではこれまでにこなわれてきた古墳整備に関する研究を概観し、古墳整備の研究史をまとめる。従来の古墳整備史研究において欠けていた視点と課題を明確にするとともに解決すべき点を明らかにすることで、本書でおこなう作業の研究史

上の意義づけを明確にする。

「第4章 古墳整備の件数と推移」では、国による史跡指定を受けた古墳について、国庫補助事業の実施状況を整理し、古墳整備の変遷を明らかにする。これにより古墳の整備がその時々
の社会状況と埋蔵文化財保護体制との係わりの中で進められたことが明確になる。今日的な古墳
の整備状況を画一的に理解するのではなく、動的に展開してきたものとしてより適切に理解するた
めの視点を得る。

「第5章 古墳整備の内容と変遷」では各年代におこなわれた古墳整備の内容を確認する。各
年代にどのような古墳整備がおこなわれたのか、そしてそれはどのように変遷したのかを整理す
る。これにより古墳整備の主眼はどこにあったのかを明らかにし、古墳とその時々
の社会との関わり方の実態を解明するための基礎資料を整える。

「第6章 古墳の特質と整備」では第5章で明らかにした古墳整備の変遷の全体を評価すると
ともに、第2章で確認した古墳の特質・古墳の文化財としての特質と古墳整備の実態との関係
を検討する。これにより古墳は地域の歴史の継続性と現代社会へのつながりを明確にするための重
要な要素となることを明らかにする。

以上の構成で検討し、本書が掲げた目標を達成する。